

自己・環境・他者が関わり合うことによって生まれる表現

～鑑賞活動が生きる造形的な表現活動をととして～

西原 有香莉

造形的な表現活動において、子どもは、自分なりの表現を追い求め、試行錯誤する。その過程には「自己」「環境」「他者」の関わり合いによる感性的な対話があると考え。その三項間における対話が多様に行われることで、子どもの豊かな身体感覚に刺激を与え、形や色と豊かに関わる力が育まれていくのである。そこで、本研究では、対話を活性化させるのは、形や色が私たちの感覚や感情に働きかける力を子どもが実感することであると考え、視覚性に留まらない幅広い感性的な世界での対話に着目し、題材の開発を試みた。言葉や概念とは簡単に結びつくことない形や色の世界に、身体で関わりながら表現を探究していくことをねらい、今回、描線活動に取り組んだ。子どもたちは、筆を動かすことにより、筆先の弾力性や絵具の粘度による刺激を身体感覚で受け止めると同時に、体験の痕跡として描かれた（描きつつある）線を視覚により、再び確認していくこととなった。描線活動に取り組む中で、子どもたちは線の質が何らかのイメージをもたらすことへ気付いたことから、自分なりの表現をめざし、線による造形的な探究を行う子どもたちの姿が見られた。

キーワード：対話性、描線活動、コミュニケーション

1. 研究の目的

私たちは、身の回りの世界を、全身の感覚を働かせて認識している。認識した形や色、イメージなどを基に、そのよさを感じ取ることで、新しい価値や意味をつくりだしているのである。それは、本来子どもがもつ力であると共に、図画工作科において伸ばすべき力であると考え。

図画工作科は、一般に、完成させられた作品ではなく、そこに至るまでのプロセスの中に学びを見出してきた。このことは、上記の力を伸ばすことと、深く関連している。そのプロセスにおいて、子どもは全身の感覚を働かせて形や色と関わり、イメージの創造と表出を繰り返す。そこには「自己」「環境」「他者」が三位一体となってつくりだされる多様な対話があると考え。その対話こそが、図画工作科における学びに、広がりと深まりを与える鍵となると考えた。

1. 1. 対話としての造形活動が開く、図工科の学び

子どもは、素材や場、空間と関わることで造形活動を行う。ここでいう素材は、絵具や画用紙、粘土などのように、図画工作科の表現のために整えられたものだけではない。樹木や土、石や水などの自然物も造形活動の素材となる場合がある。このことから広い意味での「環境」との出合いを果たし、関わり合いの中で、造形活動を行うのである。

そのような「環境」と子どもの柔軟な身体感覚が出合い造形活動する中には、多様な対話がある。「環境」と向き合い、関わる中で、生み出され続ける形や色との感性的な対話である。そこに、子どもは、自分らしい表現の価値や意味をつくり出していくのである。その経験は、子どもが本来持つ感性に刺激を与え、さらに身体感覚として蓄積されていく。それは、形や色に関する新た

な気づきだけでなく、自己の認識の変容にも気づくこととなるだろう。そのような実態から、活動によって生み出されていくかたちは、自己を映し出している鏡であるともいえる。まさに、造形的な表現活動では、感性的なレベルでの自己との対話が行われているのである。

そして、そこに「他者」が加わることで、さらに学びが広がり深まりを見せると考える。自己の生み出した作品、または造形活動途中の成果物をコミュニケーションの媒介とした対話は、自己と他者の表現の違いや、互いのよさに気づくこととなる。また、その気づきを共有する手段の1つとして、言語がある。言語によるコミュニケーションが加わることで、他者の感じ方を知り自分の表現の新たな価値に気づくことにもつながるだろう。

いずれにしても、子どもが持つ豊かな身体感覚に支えられた感性的な対話は、子どもたちの心へ働きかけながら、様々な言語的認識の世界をも広げていくと考える。

1. 2. 造形的コミュニケーションの自覚化を促す鑑賞活動

1. 1で記述しているように、対話を支えるのは自己・環境・他者の「関わり合い」であると考え。そこで、その「関わり合い」をより活性化させるためには、作品や造形途中の成果物のコミュニケーションの媒体としての価値に、気付くことであると仮定した。形や色は、何らかのイメージをもつことや、自分のもつイメージを伝えられる力があるということを知ること、自分のつくり出したかたちのもつ価値に気付くことや、他者との表現をめぐる対話が自然発生的に行われていくのではないかと考えたからである。

以上のように、対話が学びの深まりに良い影響を与え、その対話において生み出される「対象」としての表現物が、コミュニケーションの媒体として子どもの感性的な学びに機能していくと考え、その題材の開発と検証を試みた。

2. 研究方法

2. 1. 鑑賞活動を引き出す表現活動の題材計画

中国では、古来、絵画の価値を第一に「気韻生動」とし、作者の生き生きとした躍動感や緊張感が筆を通し、線となって画に投影されると考えられていた。このことから「線」の表現の質は、作品の印象に大きく影響を与えるということが分かる。このような絵画表現の原点ともいえる「線」がもつ魅力と表現の可能性を、子どもたちの「形」や「イメージ」に関する知覚と結びつけ、それらが鋭敏に働く題材を探っていきたいと考えた。

子どもたちにとって「線を書く」という行為は、鉛筆や筆、ペンなどを使うことによって日常から行われることから、特別な活動という意識は少ないだろう。記号や文字などの意味をもつ日常的な線描活動から脱し「線を自らつくり出す」ことを、より自覚的に行うために、本題材では、とっておきの筆をつくらせていくことから出発した。筆に使用する糸の質感や束ね方、穂先の長さなどによって、線の表現は多様に広がる。また、持ち手を長くするなど、故意に障害や抵抗を組み入れることによって、描線活動そのものを楽しむことや、線を描くという行為の意識化につながることを予想したからである。どのような線が描けるのか試し、またつくって試す、ということを繰り返していく中で、子どもたちは自身がつくり出した「線」の魅力や質といった、線の造形的な世界を無意識に体験していくことを仮定した。

とっておきの筆を完成させた後、音楽や効果音をその筆を使った線により表す活動に移る。まずは、音源を全身で感じながらオノマトペ化する。そして、音源とオノマトペからイメージを広げ描線により表現する。こうしてつくり出された多種多様な線のカードを、子どもたちで並べ方を工夫しながら飾る。線につけられたオノマトペが、感性的な表現についての語りを可能にし、並び替えにおいて、自己や他者がつくり出した表現の“かたち”と向き合い「線」の表現性を再確認することにもなると考えたからである。

以上のようにして、子どもが本来持つ「形」や「イメージ」に関する知覚を鋭敏に働かせることで、「線」の魅力に迫ることができると考えた。

2. 2. 「つくり出す」喜びを味わうしかけ

4月当初、本研究の対象児である子どもたちと図画工作科の学習を進めていく中で「主題に沿ったものをそっくり描きたい。」という意識や「絵が上手＝写実的表現が巧みである」といった、高学年に多く見られる意識があるように感じた。そのことから、図画工作科における表現活動に苦手意識をもつ子どももいた。そこで、写実的に描くことにとらわれている子どもが、「線」の造形的な魅力や表現性について気付き、感性的なイメージの世界を体験してほしいと考えた。その感性的なイメージの世界において、自分なりの表現をめざし創造的な活動が展開されていくことがねらいである。

本題材では、線をつくり出す道具（とっておきの筆）から作っていくことで「自分だけの線」といったこだわりをより強くもつことができると考える。さらに、と

ておきの筆に使用する素材や持ち手の長さなどの工夫によって「線」の表現がさらに広がることや、線を描く際に体験する身体感覚も多種多様になることも予想する。

そして、友達（他者）がつくり出した「線」と見比べてみると、また違った「線」がつくり出されていることに気付くだろう。それは「線」の表現は無限に広がりを見せることへの気付きとなり、それぞれの「線」がもつ“感じ”を知覚し、自分が生み出した「線」の造形的な価値を改めて実感することにもなる。そこに「線」をオノマトペとつなげる活動を組み込んでいく。「線」のイメージを言語化することで「線」をめぐる他者とのイメージの交換が可能となり、自己と他者との感じ方の違いや自己の感性の特質について、はっきりと確認することができる。「線」を媒介としたコミュニケーションに言語が加わることで「線」によるコミュニケーションの力を実感できると考えるからである。

様々な活動からつくり出された「線」を目の当たりにすることやその「線」の表現について語り合うことによって「線」の表現の可能性を感じるだろう。そして、その感覚は、まだ見ぬ「線」の表現への意欲や興味に繋がると考える。手の動き、目での認識、言葉での意味付けによる「線」の感覚的世界の体験を重ねることで、「線」の認識が深まるとともに、「とっておきの線」をめざして、活動が誘発されるような学びを進めたい。

3. 授業の実際

1学期、子どもたちは、毛筆用の筆による描線の活動を行った。筆の動かすスピードや力入れ具合、手首の返し方などによって表れた、多種多様な

「線」を目の当たりにしながら、自分なりの「線」を追究した。身体の動きと筆が一体となり描き出された子どもたちの描線は、勢いがあり魅力あるものであった。描き出された「線」を互いに鑑賞

し、語り合うことで、他者との感じ方の違いや自

己の感性の特質について気づく姿も見られた。また「線」だけに、なんだかいい」といった感想もあり「線」のもつ造形的な魅力やその質の多様性に気付く子どももいた（図1）。



図1 身体の使い方が表れた線

その中で、何らかの記号や図を描き出す子どもが複数見られた(図2)。また、線を描く行為自体に楽しみを覚え、無心で線を描き続け、真っ黒に塗りつぶしてしまった子どももいた。一見、楽しんで描線活動しているように見えるが、それは「線」もつ質や魅力に迫り切れていないということを示している姿でもある。このような子どもの実態による反省から、より「線」の質に迫ることができるよう、2学期は「とっておきの筆」作りを設定し、本題材に取り組んだ。

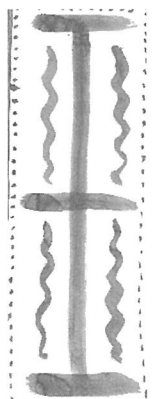


図2 記号や図の表現の為に描き出された線

3. 1. 描線のための道具(とっておきの筆)作りを通して、線の質への意識を高める

3. 1. 1. 素材の質を知ろう

始めに「線」の質に直結する「穂」をつくる活動に取り組んだ。穂に使用するのは、身の回りにある糸である。糸と言っても、動物製の毛糸や、縫い糸、麻製の糸や上靴入れに使う紐など、様々にある。そんな様々な種類の糸から、穂先に使う糸を選ぶために、まずは、様々な糸に触れる時間の設定をした。

触ったことによる気付きは「モフモフする」「やわらかい糸と硬い糸がある」「ごつごつしている糸がある」などがあり、手触りに関することが中心に挙げられた。さらに聞いていくと「細い糸が交わって、太い糸になっている」「一本の糸から、細い糸が毛のように出ている」など、糸に触れていく中でよく見たことからの気付きもあった。また「しゃきしゃきしている」というように、聴覚からの気付きもあったようだった。

すべての糸の感触を確かめた後、穂をつくる際、どのような工夫が考えられるか問うと、以下の5点を挙げていた。

〈とっておきの筆の穂づくりでできそうな工夫〉

- ①素材(やわらかさ)
- ②長さ
- ③量(束ねる本数)
- ④太さ(束ねた時の全体の太さ)
- ⑤色

子どもたちが気付いた線の質に関係しそうな要素

その中でも、①～④は、「線」を描くときに関係する要素であることへの気付きがあった。また、色々な糸の素材を混ぜてみるというアイデアもでてきた。

3. 1. 2. 『とっておきの筆の穂をつくろう』

様々な糸に触れることで決めた糸を使って、筆の穂づくりを始めた。子どもたちは、前時の素材体験で出合った筆の穂づくりのための工夫を意識しながら、活動に取り組んでいた。

縫い糸のひょろっとした特徴を生かし細い穂先をつくらせている子どもや、様々な素材の糸を組み合わせている子ども、とても長い穂先をつくらせている子どもなど、

様々に自分なりの工夫をしながらつくりだしていた(図3)。

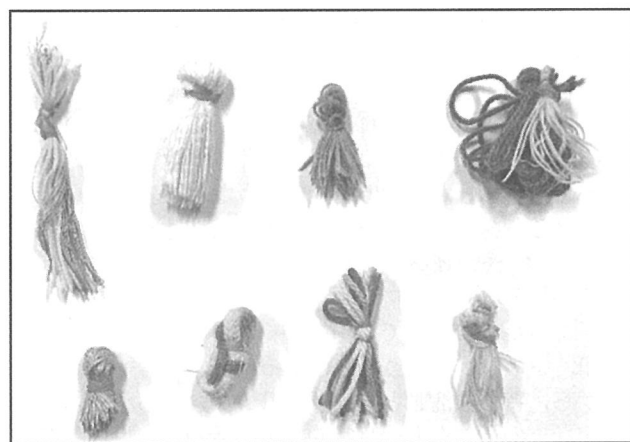


図3 様々に工夫された筆の穂

糸の感触を気に入る、筆先をつくらせている子どもが多くいたが、その中でも、図4の児童2名は、一指し指程の太さの毛糸を選択し、穂先づくりに取り組んでいた。ふわっとした感触が気に入ったようで、その感触を生かし、両手程の大きな筆先をつくり出していた(図5-1、図5-2)。

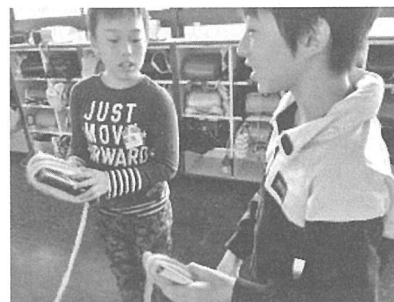


図4 筆の穂づくり



図5-1 図4左側児童作品

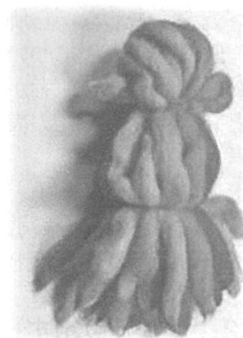


図5-2 図4右側児童作品

3. 1. 3. 『どんな線が描けるかな?』

お試しタイム!』

とっておきの1つをめざしていく中で、いくつか穂をつくらせてどれにしようか迷っている子ども、穂先の糸のほぐし具合をどうしようか考えている子どもなどの姿が見られた。そこで、自分のつくった穂がどのような線をつくり出すことができるのか、お試しタイムを設定した。何度も「試す」ことや、つくり変えることができるように、水書版を用意した。

何度も線を描いて、自分のつくり出した線とじっくり向き合う姿(図6)、自分と友達のつくり出した線を見比べる姿(図7)などが見られた。



図6 自分の描き出した線と向き合う

見られた姿

- 描いた線をじっくり見る
- 描く時の身体の動き(手首の返し方など)を変えながら描く
- とにかく線を描き、様々な表れる線の表現を楽しむ



図7 友達の線と比べる

見られた姿

- 友達の筆の穂を見比べる
- 友達の描く時の身体の動きを見る
- 友達の筆の穂と交換して描いてみる

穂の長さを切ったり、穂先の形を整えたり、穂先の糸のほぐし具合を調整したりしながら、何度も描いて試し、とっておきの1つを子どもたちは作り上げていた(図8)。その中で、3. 1. 2で触れた子どもたちは、自分の思ったような線が描けないことや、スムーズに線が描けないことに気付き、図5-1は図8中の29番の穂に、図5-2は図8中の22番の穂につくり変えていた。

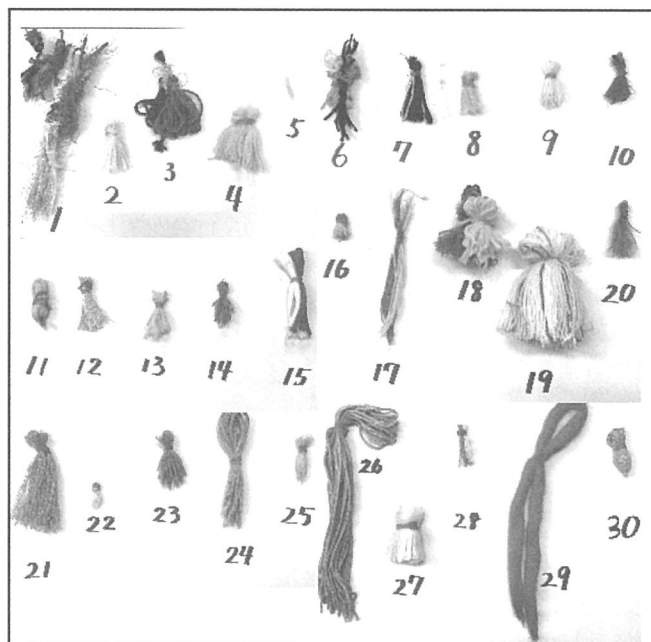


図8 完成した筆の穂

図8中の筆の穂制作にあたって、それぞれの工夫が見られ、こだわりがあった。とっておきの筆の穂に込めた

こだわりについての子どものメモを、ワークシートより抜粋し以下に示す。

*番号は、図8中の番号の筆の穂を作成した児童に対応

- 1 : かたい物ややわらかい物をいれて、線にやわらかさと細さをだす。
- 9 : 素材はふわふわの糸を使った。穂先をきれいにそろえました。あとで、筆みたいな形にしました。友達(28番)のを参考にして下を筆みたいにしたら、きれいにかけてパサパサ感がなくなってよかったです。
- 11 : ひものような糸を使った。糸は2色。(穂先を)1本だけ出す。1本だけ出したところは、小筆になり、力を入れて全部かくと大筆になる。
- 30 : ぼくの穂先は、最初は平らでしたけど、かいいりょうして、とんがらせました。ぼくの穂先の素材はわらみたいなかたい糸です。平らの時よりとんがらせたときの方が、かっこいい線が書けました。

3. 1. 4『こだわりの穂に軸をつけよう!』

試行錯誤しながら仕上げたこだわりの穂に、いよいよ軸をつける。軸は、竹を使用した。できるだけ長い竹を用意し、それぞれの思いにあった軸の長さを切り出せるようにした。竹の太さも様々にあり、地面に近い太い方を使うのか、先の細い方を使うのか、自分の穂に合う太さを考えながら、選ぶ姿が見られた。その結果、様々な「とっておきの筆」を完成させていた(図9)。



図9 完成した「とっておきの筆」

*左上から図8に対応した番号順

軸を付ける際に、持つ部分の手触りをつるつるにしようとして紙やすりでこする姿や、枝分かれしていた後の凹凸をできるだけなくそうと丁寧に切り取る姿が見られた。このような姿から、自分の「とっておきの筆」に込めた

こだわりや、思いの強さが感じられた。また、自分の「とっておきの筆」に対する思いを以下のように、振り返っている子どももいた。

○図工で世界に1つだけの筆を作って、持ち手をもう少し細くしたかったけど、筆の穂にぴったりの竹が見つかったので、こんな筆にしました。

○筆の持ち手をつくりました。とてもきれいな形になったのでとてもうれしいです。どんな線がかけられるのが、すごくまちどおしくなりました。

このようなそれぞれの思いがつまった「とっておきの筆」を使用し、子どもたちは「とっておきの線」を描く活動に入っていく。

3. 2. 「とっておきの筆」での描線活動により、多様な描線活動の体験と、線の表現の質を味わう

3. 2. 1. 『「とっておきの線」を描こう』

それぞれの作った「とっておきの筆」を使い、描線活動をする。本研究のねらいである、線がもつコミュニケーション媒体としての価値に迫るため、音楽を線で表現するという活動を設定した。音楽は、効果音のようなものを3種類用意した。また、1学期は白地に墨汁で描線活動をした結果、あまり線の質に着目できていなかったという実態があった。

このことから、非日常的な描線活動の体験をめざし、黒地に白の線を描くようにした。



図10 「とっておきの線」の表現活動

音楽をオノマトペで表し、それを線で表すという活動の中で「音をオノマトペで表せられないけど、線では表現できる」という子どもがいた。これは、音を身体感覚的にとらえ、イメージしたことを手の運動感覚と結び付け、表そうとしていると考えられる。言語化できないまでも、音を感覚的にとらえ、イメージを広げられていたことが予想できる。また、同じ音を聞いた描線にもかかわらず、全く違った線が描き出されているのに気づき、友達の線と見比べる姿も見られた。線だけでなく、自分と違った筆での描線活動を目の当たりにすることで、初めは自分の「とっておきの筆」による描線活動にしか興味が向いていなかったが「友達のとってお



図11 多様な描線活動

きの筆を使ってみよう」という声も聞くようになった(図11)。

3. 2. 3. 『「とっておきの線」を並べて見よう』

「とっておきの線」を5人ずつのグループで鑑賞をしよう。ただ鑑賞するのではなく、1人3作品ずつできた線を並べるのである。並べ方は、グループで話し合う。並べ替えの論点として、3. 2. 2. で行った活動の逆を辿ることとした。つまり、今度は「線」からオノマトペを発想し、そのオノマトペを楽譜に見立て並べ替えるのである。

グループによって、作品を全部並べるところや、何枚か厳選して並べるところなど、様々な活動の姿があった(図12)。



図12 「とっておきの線」の並び替えの様子

4. 授業の考察

4. 1. 対話が生み出す「つくり出す」喜び

1学期、子どもたちは毛筆用の筆と墨汁を使い、白い画用紙に線を描く活動をした。その際、初めにテーマを与えず、手や腕の使い方や筆の特性を生かすことで、自分だけにしか描くことができない線の表現をめざし、活動に取り組んだ。そして、できた線にオノマトペをつけるという活動をして鑑賞活動も取り入れた。

今まで、文字や記号を書く道具でしかなかった線を、腕や手首を大きく使って描いていく行為を楽しんでいた様子であった。描くスピードを早めたり遅めたりすることで、線に勢いがでたりにじみがでたりすることに気づく子どももいた。友達と線とその線から発想したオノマトペを見合い、聞き合う活動からは、他者との感じ方の違いに驚く様子や感覚のずれを楽しんでいる姿が見られた。

しかし、線を描く活動が進んでいくにつれ、徐々に“線のもつ質”から意識が離れ、“描く行為の楽しみ”へと意識が移っていった。そのことは、一本の線の上に、また違う線を描き重ねたり、描き重ねた結果、真っ黒になってしまったりしていたことからわかる。この反省から「とっておきの筆」をつくることから始めることにした。

線を描く活動に入った時の子どもたちの様子は、全く違っていた。それぞれの作った「とっておきの筆」を手にした子どもたちは、早くどんな線が描けるのか待ちきれない様子だった。線を描くための紙を配付した時点で「先生、もうかいていい?」という声をたくさん聞いた。実際に描いた後には「どんな線描けた?」と隣の友達に話しかける様子があった。筆の穂に3. 1. 1. で記述しているような工夫の違いで、描き出された線がどのように違うのか見比べている様子が見られた。

このような姿が見られたのは、筆の穂に使用する糸の素材体験や、「自分だけの」「とっておきの筆」という意識が根底にあると考えられる。筆の穂を作る際、糸の特質を、身体感覚を通して味わい、そしてできた穂を描き試し、また作り直しては試すという行為の中には、自己と自己、または自己と対象（自分がつくり出した線の表現）との対話があったといえる。正解がない中で、自分がいいと思う線をめざし、自分の運動感覚とそれによって生み出されていく線の質を確かめながら、完成に近づける。それは、まさに、自己との対話が繰り返されている姿の表れであるとともに、自分だけにしかつくり出せない線の表現を追い求める姿であった。

また、自分だけにしかつくり出せない線への気付きは、同時に友達だけにしかつくり出せない線への気付きでもある。初めは、自分の線にしか興味を示していなかった子どもが、友達の線の表現にも目を向けるようになっていた（図13）。



図13 自分と異なる線の表現への気付き

3）。また、友達と線の表現をめぐる、話す姿も見られた（図14）。このような姿は、線がもつ表現性への気付きがあったことを示している。



図14 線の表現をめぐる他者との対話

線のかたちのおもしろさや多様さへの気付きが、他者となげ、そして多様な対話が生み出された。そして、その対話が、自分がつくり出した線の表現の価値への気付きをさらに深め、「つくり出す」ことの喜びを味わうことにつながり、さらに対話が生まれるといった循環ができたといえるだろう。

4. 2. 線を媒介とするかわり合い

上記にあるように、線の表現をめぐる他者との対話があった。友達と自分との線の違いを認め、比べる姿は、線のもつ表現性への気付きがあったからであるといえるだろう。しかし、この時点で子どもたちは線が何らかのイメージを伝える力があることを自覚していないことが考えられる。そこで、線がコミュニケーションの媒介としての価値をより自覚できるようにするために、線の並び替えによる鑑賞活動を取り入れた。その並び替えの特徴は、以下の2点であった。

①線のかたちからオノマトペを発想し、そのリズムのよさによる線の並び

②線のかたちからイメージを膨らませ、物語性のある線の並び

以上のどちらも線がもつ表現性によりイメージを広げ、並び替えを行ったことには変わらない。しかし、①は線によるイメージを言語化し、その言語によるリズム

のよさを感じ、さらに音楽的な感性を働かせ、並び替えを行っている。①のような並び替えをしたグループには、線からイメージするオノマトペを言いながら順番を変え、どの順が心地よい並びなのか考える姿が見られた（図15）。

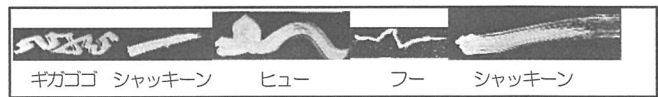


図15 線からイメージしたオノマトペの音のリズムを楽しむ並び

また、終わり方にもこだわり「勢いがあってかつこい終りの線を選んだ」という考えも聞けた。

それに対し、②は線のそのものの質から、具体的な物語を既存の知識とつなげ合わせて発想し、並び替えを行ったのである（図16）。

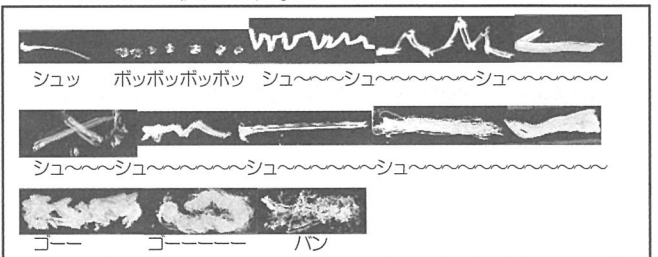


図16 線から物語をイメージしたことによる並び

図16の並び替えをしたグループは、魔法の杖から閃光が走り、最後に爆発するイメージを線の並び替えによって表現している。最後の線は、激しく光が飛び散っているように感じたという考えも聞くことができた。

いずれにしても、線のもつ表現性を感じ取ることで、そこから広がったイメージに関する対話が積極的に行われていたといえるだろう。グループ内でイメージに関する対話がオノマトペによって実現されていたことも分かる。

5. 成果と課題

未だ、意味づけられ名付けられない線の世界であるがゆえに、感性を働かせ自己の感覚を呼び起こすことが重要であった。初めは戸惑いを見せている子どももいたが、活動が進んでいくにつれ、自分の身体の動きと「とっておきの筆」の特質が合わさって生み出されていく線のおもしろさを感じ、線を何度も描き試したり眺めたり、考え込んだりしている姿が見られた。そこには、線の魅力に気付き、自己と対象との間に起こっている、感性の幅広い対話があったことが分かる。また、（未だ明確な意味をもたない）オノマトペが指標として働くことにより、並び替えることによる鑑賞活動が、より操作的になり、多様な言語活動につながっていく道が開けたように思う。

今回、線の質や魅力への気付きには成果があったと感じているが、その気付きを次の表現活動に生かすことができなかったという思いが残った。鑑賞と表現の活動を一体化させることで、より豊かに感性を働かせ形や色に働きかけたり刺激を受けたりすることができるのではないかと考える。鑑賞と表現の活動とが一体となって、より豊かに形や色にかかわる態度や「つくり出す」ことの喜びをさらに実感できるような研究を考えていきたい。